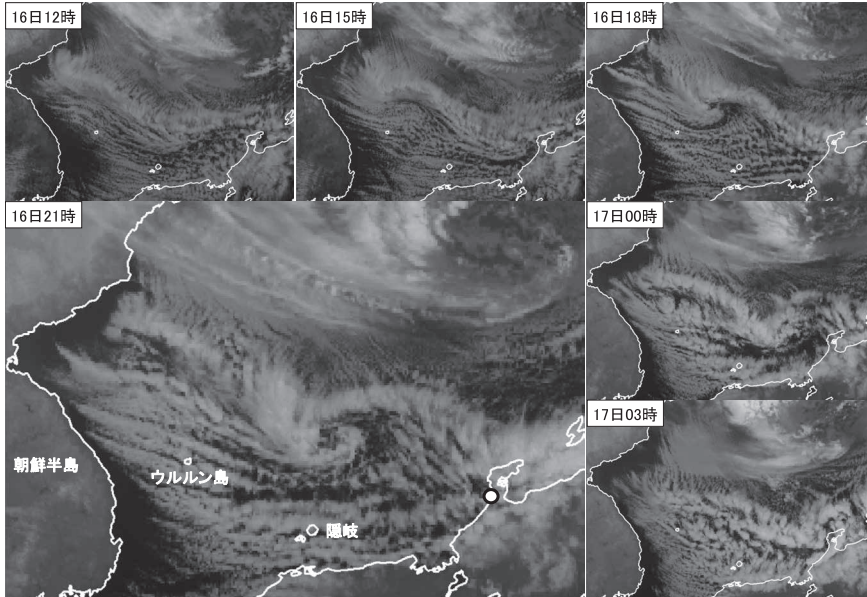


今月のひまわり画像—2022年2月

日本海寒帯気団収束帯上に発生した雲渦



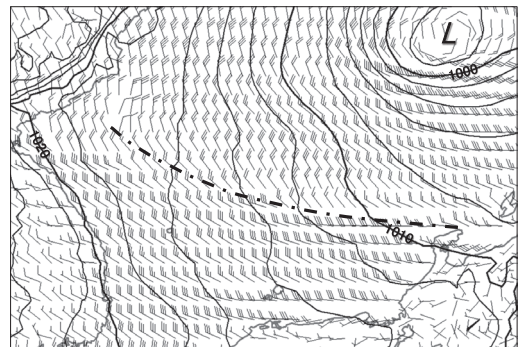
第1図 2022年2月16日12時～17日03時（日本時間）の日本海付近における赤外画像、○印は石川県羽咋。

第1図は2022年2月16日12時～17日03時（日本時間）の日本海付近における赤外画像である。16日12時には能登半島の北から西北西へのびる日本海寒帯気団収束帯（以下、JPCZ）に対応する帯状の雲域が見られる。同日15時頃になると北朝鮮から東南東進してきた上層寒冷低気圧の接近に伴い、ウルルン島の北のJPCZ上に低気圧性循環の雲域が現れ始め、18時頃になると雲渦が明瞭となった。21時になると雲渦は隠岐の北へ進み、その後次第に形を崩しながら東南東へ進んだ。低気圧性循環は気象レーダーの探知内に入ると確認できるようになり、17日03～04時に能登半島付近を通過し、その後不明瞭となった。この低気圧性循環の通過に伴い、アメダスの石川県羽咋では同日03時49分に最大瞬間風速22.7m/sの西北西の風を観測した。

16日21時の気象庁局地モデル（LFM）を見ると（第2図）、JPCZ上に発生した雲渦に対応する低気圧は表現されていない。これは雲渦の規模が小さく寿命が短いため、数値予報モデルで表現されないことは珍しくない。その一方で、雲渦の接近・通過により、急激な風の強まりや波の高まり、短時間での降雪量の増加

があり、過去には船舶の沈没や突風害が発生した事例もある。このことから、気象衛星画像でJPCZ上の雲渦の発生を捉え、その推移を監視することは防災上有用である。今回、気象庁は海上警報の最大風速を上方修正し、風雪の強まりに対して気象情報を発表して注意を呼びかけた。

（気象庁名古屋地方気象台 原 基）



第2図 2022年2月16日21時のLFM（16日21時初期値）の地上風（短矢羽根は5kt（1kt≒0.51m/s）、長矢羽根は10kt）、等圧線（2hPa毎）で一点鎖線はJPCZを示す。